



公益社団法人 岐阜県交響楽団

〒501-3133 岐阜市芥見南山3丁目7の10
 TEL<058>244-0150 FAX 244-0151
 ホームページ <http://www.ktroad.ne.jp/~gikyoo/>

クラシック音楽と映画

公益社団法人岐阜県交響楽団
 理事 碓井 洋



私は昭和二十九年（一九五四年）十一月に生まれました。前年の二十八年九月に岐阜交響楽団として発足した岐響の歩みは、私の人生とも重なります。昭和五十年（一九七五年）四月に社団法人化され、現在の岐阜県交響楽団に改称したと聞いておりますが、戦後の復興期を経て昭和の高度成長期、そして平成の世へと歴史を刻んできた交響楽団の歩みに心からの敬意を表したいと思えます。

はめつきり本数が減りましたが、過去に見た作品の中には作曲家や演奏家を主人公にした印象的な映画が多数あります。モーツァルトの数奇な生涯を描いた「アマデウス」（一九八四年、米国）はご覧になった方も多いでしょう。彼の早すぎる死については謎が多いのですが、映画では彼の才能に嫉妬した凡庸な音楽家サリエリが殺意を抱き、モーツァルトに貧困と死への恐怖を与えて殺してしまったという物語です。映画に使用されている素晴らしい楽曲はモーツァルト・ファンを魅了してやみません。交響曲第25番、ピアノ協奏曲第20番、レクイエム、そして「フィガロの結婚」などの歌劇。アマデウス（神に愛された者）という名称にふさわしい天才の世界に浸ることができます。

突然ピアノを弾き始め、居合わせた客から喝さいを浴びるシーンが感動的です。ショパンの「雨だれ」、ベートーベンのピアノソナタなどが登場しますが、何といても庄巻はラフマニノフの「ピアノ協奏曲第3番」でしょう。主人公はこの曲に人生を翻弄され、この曲によって奇跡の復活を遂げます。

私は子供の頃から楽器が苦手です。小学校低学年の音楽の授業でハーモニカや縦笛の練習を強いられた際に、早々と音楽への道はあきらめました。その後、中学校の授業でやたらクラシック音楽のレコード（もちろん当時はCDやDVDはありません）をかける女性教師がおられて、授業中にモーツァルトやベートーベン、シューベルトの名曲を聞かせてくれました。楽器は苦手な私でしたが、なぜか音楽鑑賞テストの成績だけは良く、女性教師はそれだけで通信簿に最高のレコード鑑賞がクラシックの原点です。

もう一つ私が好きな映画は、「シャイン」（一九九六年、オーストラリア）。現在のピアノリスト、デヴィット・ヘルフゴットをモデルにしています。かつて神童と呼ばれたピアノリストが父親のスパルタ教育で成功するものの、激しい練習の果てに精神を病んでしまいます。その後、奇跡的な復活を遂げるまでが描かれています。浮浪者のような彼がカフェで

さて、私はクラシック音楽を聴くことは好きですが、まさか岐響の理事に就任させていただくと、数年前まで想像もしませんでした。新聞社の社長として、岐響のPRや支援活動、さらに

近年の作品では「25年目の弦楽四重奏」（二〇一二年、米国）がおすすめです。世界的に有名な弦楽四重奏団が結成二十五周年を迎えますが、リーダー格のチェリストがパーキンソン病のため引退を余儀なくされます。ほかの男女三人は動揺し、存続の危機に立たされたメンバーの葛藤が恋愛感情も絡めて描かれます。ベートーベンの難曲「弦楽四重奏曲第14番」が効果的にドラマに生かされています。

大学時代は映画が好きで、年間50本近く見ていました。最近

好きな映画の話ばかりで、与えられた紙数が尽きました。最後になりましたが、記念すべき「創立70周年」に向けて、岐響が益々活躍されますことを心から祈っております。

岐阜新聞社 代表取締役社長

ロマン派のトビラを開ける！指揮者…井村 誠貴

2011年『3000人の第

演奏会だと伺った。それはそれは

響60周年「復活」で新たな岐響が

「第九」を皮切りにロマン派のトビ

九」以来、私の仕事は激変した。それまで第九を指揮させて頂く機会

興奮した。断る理由など一つもなかった。オペラ・ミュージカルといった舞台作品の世界に長くいた私に

蘇り、そしてその後初めての共演が再び「第九」である事は、驚きでありまた縁の深さを感じずにはお

れない。さて、「岐阜3000人の第九」以来、私自身の「第九」への取り組み方や解釈も変化してきたように

か？」と尋ねられても、答えすら見

作品を指揮する事は憧れだった。そしてコンサートは大成功の裡に

トーヴェンは、クラシック音楽を代表する古典派の作曲家である。時代の先駆者でもあるベートーヴェ

法であろう。楽器自体の進歩は、音楽の有り方も大きく様変わりさせてきた事は言うまでもないが、よ

九で潤いますね！」とはやし立て

幕を降ろした。それ以降、偶然なのか必然なのか、第九の指揮依頼が

史的重要な作品で常に新たな時代を切り開いてきた。この「第九」交

り豊かな響きを実現した事によって、音の処理は大きく転換したとい

いうのは我々にとって特別な事で、

そう簡単に振らせて頂ける訳では

響曲もまた歴史の転換期となった

重要な作品だ。それまでも声楽入りの管弦楽曲は存在したが、交響

一年の締めくくりで、その年の「顔」

と云って良い指揮者が振るのが通

曲の形式の中に声楽を用いたのは

ベートーヴェンが最初だと言われている。そして古典派からロマン派

例。まだまだ駆け出しだった私に

は当然第九は異次元の話だった。

ベートーヴェンが最初だと言われ

ている。そして古典派からロマン派

スーパーマーケットから流れてく

る第九さえ私をあざ笑うようであ

った。この作品が初演された1

824年から僅か6年後の183

から第九の依頼が来た。それも5

000人(当初目標)による第九

には大きな意味を感じている。岐

響曲」を発表している。1832年には、あまり知られていないがワーグナーもまた交響曲を完成させている。文字通りベートーヴェンの

え、この「第九」に関しては特に譜面の問題が生じるのである。つまり出版社によって音が違うこと。これは作曲家としては少々珍しいことでもある。その原因の一つはベートーヴェン自身が乱筆であったこと。五線譜を大きくまたいだ音符も存在する。見ようによっては下にも上にもミにも見えるなんて自筆が沢山あるのだ。長年研究者がその解説に心血を注いできたのだが、残念ながら結論は出ないでいる。そんな中1996年にペーレンライターが新版を発表した。ペーレンライターの楽譜は研究本と言って良いもので、これまで多くの出版社が、推測で「この音はベートーヴェンの書き間違いだろう」としてきた音符を採用するなか、作曲家自身が書いた音符に拘って解説してきた。よって音楽的には不可解な部分もそのまま残されていたりもする。一時この版での演奏がヨーロッパで大流行。作曲家が書いたままのものを、作曲家が書いた

当時の楽器(オリジナル楽器)で演奏すると言ったものだ。演奏方法も当時の奏法に拘り、いわゆる「ピリオド奏法」(ノンヴィブラート等)で演奏されてきた。オーケストラ配置も対抗配置(ヴァイオリンが両翼に配置)に戻され、20世紀に主流となったスタイルから18〜19世紀のスタイルに戻って行ったのである。しかしながら最近の主流は第3極に移行しつつあり、自筆譜を個人で研究する者も増えてきた。また、同年代に作曲された作品から、当時の手法や書き方を読み取る方法など、多種多様な解釈が広がりつつもある。これも全て、ベートーヴェン自身の乱筆に端を発している事でもある。事実、モーツァルトの様に、既に頭の中に楽譜が完成しており、あとはそれを楽譜に書き起こすだけだった作曲家の譜面では、音の相違は少ない。がしかし、長年の歳月の中で、「演奏しやすさ」という理由で音が変更されている事はモーツァルトの楽

譜にも存在しているのも事実。「シュトラウス二世などの喜歌劇を書いた多くの作曲家では、その上演される劇場のサイズに応じてオーケ編成が改訂された。よって、色んな版が存在するのもまた当然。更にはマーラーの様に、作曲家が完成後に改定を加える事も頻繁に起こるのである。ましてや第九が完成した1911年前(江戸時代・11代

將軍徳川家斉の頃)では正確な記録もないであろう。正しい解釈を研究するのも指揮者の大切な役割となっている。

さあ！復活を遂げた岐響の皆さんとどんな音楽が紡ぎだされるのか！合唱団の方々とどんな歓喜の歌を作り上げるか！ライブを私自身も楽しみたいと思っている。



「第九」演奏会に寄せて

合唱指導 永田昌彦

今回の第九で岐響第九合唱団の合唱の指導していただいたのが、永

等、地元密着の岐響には本当にお世話になっている。

田昌彦先生です。永田先生には、4年前の岐阜青年会議所主催「3000人の第九」（指揮・井村誠貴先生）においても合唱指導していただいています。この度、永田先生に今回の第九について、御執筆いただくことが出来ました。

中でも、小生が岐阜第九合唱団の指導に携わってからは、前事務局長の神原光夫先生とは旧知の仲であることから、より密接な関係となり何度も第九演奏会を開催してきた。このことが県内の合唱好きのアマチュアを刺激し、各地で第九演奏会が開催されるようになったことは誠に喜ばしい限りである。これほどまでに県内各地に波及したその原動力はまぎれもなく岐響であり、その貢献は多大である。とりわけ4年前の岐阜青年会議所主催「3000人の第九」（指揮・井村誠貴）は県民に深い感動を与え圧巻でした。

思い起こせば、岐響とは50年近い付き合いである。故本田しろき先生、故山田孝先生には何かとご教示いただいた。作曲家の故兼田敏先生が作曲された「岐阜市民の歌」のレコーディング・発表会、小生のソロ活動での共演、一時期ではあるが個人協賛会員として応援

等、地元密着の岐響には本当にお世話になっている。



▲11月1日、合唱とオーケストラの合同練習



▲10月12日、合唱団のみの練習風景

「第九について」

さて、今回の第84回定期演奏会

(羽島公演)と加納高校創立100周年記念第九演奏会(岐阜公演)は指揮に井村誠貴氏を迎え、第九に關する彼の深い洞察力、冷静、理論的でありながら情熱的な演奏に小生は大変燃えている。各地で開催される第九演奏会の模範となるべく、合唱団は経験者を中心に一般公募した。そして今回は、ドイツ語の発音と響鳴した発声を重点に合唱団を指導してきました。また、4楽章のみではなく、当然のことであるが全楽章を演奏することにしました。さらに合唱団員入場による楽曲の中断を避け、1楽章からステージに上げる(合唱団員は大変辛い)という本来の形態とした。このことはマエストロ井村誠貴氏の意味でもあり小生と一致するところである。

必ずや観客の皆様にご感動を与える質の高い第九になることと確信しております。

「岐響に期待する」

最後に、「文化不毛の地、岐阜」と昔からよく言われている。かつてバブル全盛のころ「音楽の都ぎふ」を目指し、行政が率先して展開し少なからずもその効果があり恩恵を被った時期があった。しかし、所詮専門職を持たない役人の運営では先細りは目に見えていた。昨今、日本はデフレに陥り経済力が停滞し、行政はもとより企業も芸術文化に対して還元する余裕が無くなってきた。本来ならば芸術は経済とか政治とかに左右されない不変のものであるはずであると考えている。であるならば、行政や企業に依存するのではなく、今こそ底辺となる一般市民の喚起が不可欠であり、その原動力となる県内

のアマチュア芸術団体が団結しなければならぬ。そのためには、その母体となる最も長い歴史と知名度を持つ「岐響」が、率先して県内の音楽文化振興に寄与することが不可欠である。そのような期待を込めながら、益々のご活躍と更なるご発展を祈念いたします。



▲永田昌彦先生

着任のご挨拶

岐卓県交響楽団 事務局長 本村伸容

このたび、神原前事務局長（以後、神原先生、または先生）の後任として事務局にお世話になることになりました本村と申します。よろしくお願ひいたします。

神原先生とは、37年ほどのお付き合いになると思います。先生と初めてお会いしたのは、確か私が岐阜県の教員として採用されて数年経った昭和53年の夏頃、西濃地区の高等学校音楽連盟の集まりがあった時のことです。その当時、私自身、教員としての悩みがいろいろあり、神原先生が西濃地区だけではなく、県下の音楽の教員を束ねる立場にもおられたことから、随分いろいろなことでお世話になりました。今あるのも先生のお陰といつても過言ではないと思ひます。

そんな先生から岐阜県交響楽団の事務局のお話をいただいて、当初は随分悩みました。教員を退職してから、縁があつて教職員互助会岐阜

市支部で事務局の仕事させていただいていたこともあり、二種類の仕事をこなせるほどの器用さもなく、お断りをさせていただいていました。そうこうしているうちに、退職後5年

が経ち、前述の互助会の仕事も一段落していたところに、再び先生からお話がありました。折しも、先生が体調を崩され、これ以上お断りし続けてご迷惑をおかけするのも本意ではないので、お引き受けることにしました。ですが、先生のように長い間交響楽団に貢献されていた方の後を受け継ぐのは、少々荷が重すぎるのではないかと未だに悩んでいます。永年演奏活動を続けられ、幅広く活躍の場を持つておられる方ならともかく、私などは教員の世界しか知らないうえに人間的にも未熟で、音楽に精通しているわけでもありません。このような者で務まるのでしょうか。岐

卓県交響楽団には、幅広い年齢層で家庭的にも社会的にも様々な立場の

人たちがおられます。また、多様な演奏を異なった場所で実施していかなくてはならないのではなからうか。日々の業務を着実に遂行して

いけるのかといった不安が未だに重くのしかかっています。永年にわたり活動を続けているオーケストラであり、歴史的にも重みがあります。団員の方々やその活動を支えておられるご家族や理事、運営委員の方々、そして会員の皆さまにご迷惑をおかけするわけにいきません。また、オーケストラの演奏を楽しみにされている県民の皆さま方のご期待を裏切るようなことがあつてはならないと思ひます。こうした多くの方々のご要望に沿うことができるよう、できる限りの努力は惜しまないつもりではありますが、なにせ私自身の器量の乏しさでは到底成しえませぬ。何とか皆さま方のお力添えをいただきながら、責務を果たしていきたいと思ひます。どうかよろしくお願ひいたします。

ところで、私は3年間という短い期間ではありましたが、以前ふれあ

い会館（現、ふれあい福寿会館）サラマンカホールに勤務していたことがあります。教員生活も24年目。当時、私は高校の音楽の教員として、また、吹奏楽部を指導する顧問としても大変充実した日々を送っていました。

担任も授業の関係で1年生ばかりでしたが、毎日やり甲斐もあり、楽しく勤務していました。ところが、何の前触れもなく突然、県の知事部局への内示がきたものですから、青天の霹靂とはこのことでしょうか。半信半疑のまま言われた場所に赴くと、そこで今度はふれあい会館に向寄せよとのこと。当時、第1棟の5階にあつたふれあい会館事務局を訪れると、そこには大学時代の先輩がおられ、「本村君、これから私と一緒にここで仕事をします。よろしく頼む。」と突然言われました。そうは言われても何のこともかさっぱり理解できませんでした。校長先生や教頭先生に尋ねても、わからないの一点張り。罰則人事ではなさそうでしたが、ついに理由もわからぬままでした。サラマンカホールでの勤務はあまりに突然で思いがけない異動の結果でしたが、教員時代にはとても得ることができないような、多

くの貴重な経験をすることができました。今思えばこの時に受けた様々な影響は、私自身に大きな変革をもたらしたといっても過言ではないと思いますし、何よりも素晴らしい財産となったことは間違いありません。

サラマンカホールでの仕事は、貸し館に伴う業務もありますが、多くがホール独自の事業やプロの演奏家を岐阜の地にお迎えし、ホールでのコンサートを中心とした演奏会の企画、運営をするといった内容のものでした。いわゆるプロデューサーとしての仕事をするらしいのですが、慣れない仕事でもあり戸惑うことばかりでした。事務局のほとんどの方が県の職員で、トップは副知事。何もかもがこれまでとは全く異なった環境の中で、慣れない文書作りから企画書の作成、予算の積み上げなど今まで行ったことのない作業ばかりでした。そして、演奏家本人との交渉もあります。演奏事務所とのアーティストの出演交渉など、どちらかというところ不得手な業務が多く、失敗続きで最初の1年間は怒られてばかりでした。

ホールは客席数708席と、それほど大きくはないのですが、国産のパ

イオルガンを備えた音楽専用ホールで、音響的にも大変優れています。東京のサントリーホールや大阪のいずみホール、そして、福井ハーモニーホールとの姉妹提携など、話題性もありました。当時は県の財政もかなり豊かで潤沢に予算がついていましたので、国内はもとより、海外からも著名な演奏家を多く招聘することができました。ホールの心地よい響きと上質な雰囲気の中で素晴らしいコンサートが開催され、着任2年目からは、これほど恵まれた仕事はないのではないかと、非常にやり甲斐のある仕事内容に思いました。勤務日や時間が不規則で、体力的には少々きつい面もありましたが、感動的な演奏に出会えることも多く、素晴らしい音環境の中で音楽に携わることができて、大変充実した3年間でした。その間、音楽的に卓越した才能と高度な演奏技術により表現された演奏に魅了されるばかりでなく、豊かな人間性を備えた演奏家の方たちとの人間的なふれあいの中にも大きな魅力を感じました。シャルル・デュトワ、大友直人、リチャード・クレイダーマン、アンネ・ゾフィー・ムター、櫻本

大進、諏訪内晶子、須川展也など多くの魅力的なアーティストにお会いできたことは大変幸せでした。そんな中にあつて、素晴らしい演奏をするアマチュアの演奏団体にも巡り会うことができました。その一つが岐阜県交響楽団でした。

私が担当した事業で、ホールが公募したサラマンカ合唱団とともに、「土の歌」の公演を行ったのですが、作曲家自身が指揮をするというホール側の要望にも快く応じていただき、演奏会は感動的な盛り上がりを見ることができました。団員の皆さんはそれぞれ仕事や家庭を持ちながらも、練習のための時間を何とか捻出し、少しでも良い演奏がしたいとの一心から練習に励んでおられました。楽器が好き、演奏を通したオーケストラ活動がしたい、という単なる趣味や特技の域を越え、団員一丸となって聴衆に音楽の素晴らしさを伝えたい、音楽を通して多くのメッセージを伝えたいとの熱い思いを強く感じました。そうした思いからひたすら練習に打ち込んでいる団員の皆さんの姿に、頭の下がる思いで接していたホー

ル関係者は私だけではないと思います。そして今、奇しくもアマチュアのオーケストラとして素晴らしい演奏を続けてこられた岐響の、その事務局の仕事をさせていただくことになったのです。ことの重要性、責任の重さをひしひしと感じています。3年後には創立65周年を迎える歴史ある交響楽団。これからも未来永劫に燦然と輝き続けるアマチュアオーケストラとして、今後更に成長し続ける演奏団体であり続けるためにも、事務局としての責務をしっかりと果たしていかなければならないと考えています。どうか皆様方の一層のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。



今年の演奏活動より

実演芸術アウトリーチ事業 本巢市立一色小学校(9月27日)

この事業は、岐阜県内の実演芸術文化団体が、県内の学校教育機関や文化施設、福祉施設へ出前公演するもので、岐阜県交響楽団は今回、本巢市立一色小学校にてアウトリーチ公演を行いました。児童さんたちによる指揮者コーナーの他、オーケストラ伴奏による合唱では、元気いっぱいの歌声に私たちが感動させられました。一色小学校の先生からお言葉をいただくことが出来ましたので、ここにご紹介させていただきます。

岐阜県交響楽団のみなさまへ

錦秋の候、皆様方におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

このたびは、一色小学校芸術鑑賞会において、すばらしい演奏を誠にありがとうございました。おかげをもちまして、子どもたちは本物の音楽に触れることができ、豊かな感性をさらに広げることができました。さらに、オーケストラをバックに歌わせていただいたことや、楽器に触れさせていただいたことは、子どもたちの一生の宝物となりました。普段以上の大きな声で歌うことができたことなど、子どもたちが精一杯頑張って取り組むことができましたことをとても喜んでおります。

これも皆様方のお力添えの賜物と心より感謝申し上げます。

今後とも、子どもたちに温かいご指導を賜りますようお願いいたしますとともに、皆様方のますますのご発展を祈念いたしまして、お礼とさせていただきます。

メールにてお礼させていただき申し訳ありません。

なお、当日の様子を添付させていただきました。皆様方でご覧いただけましたら幸いです。

一色小学校 職員一同

